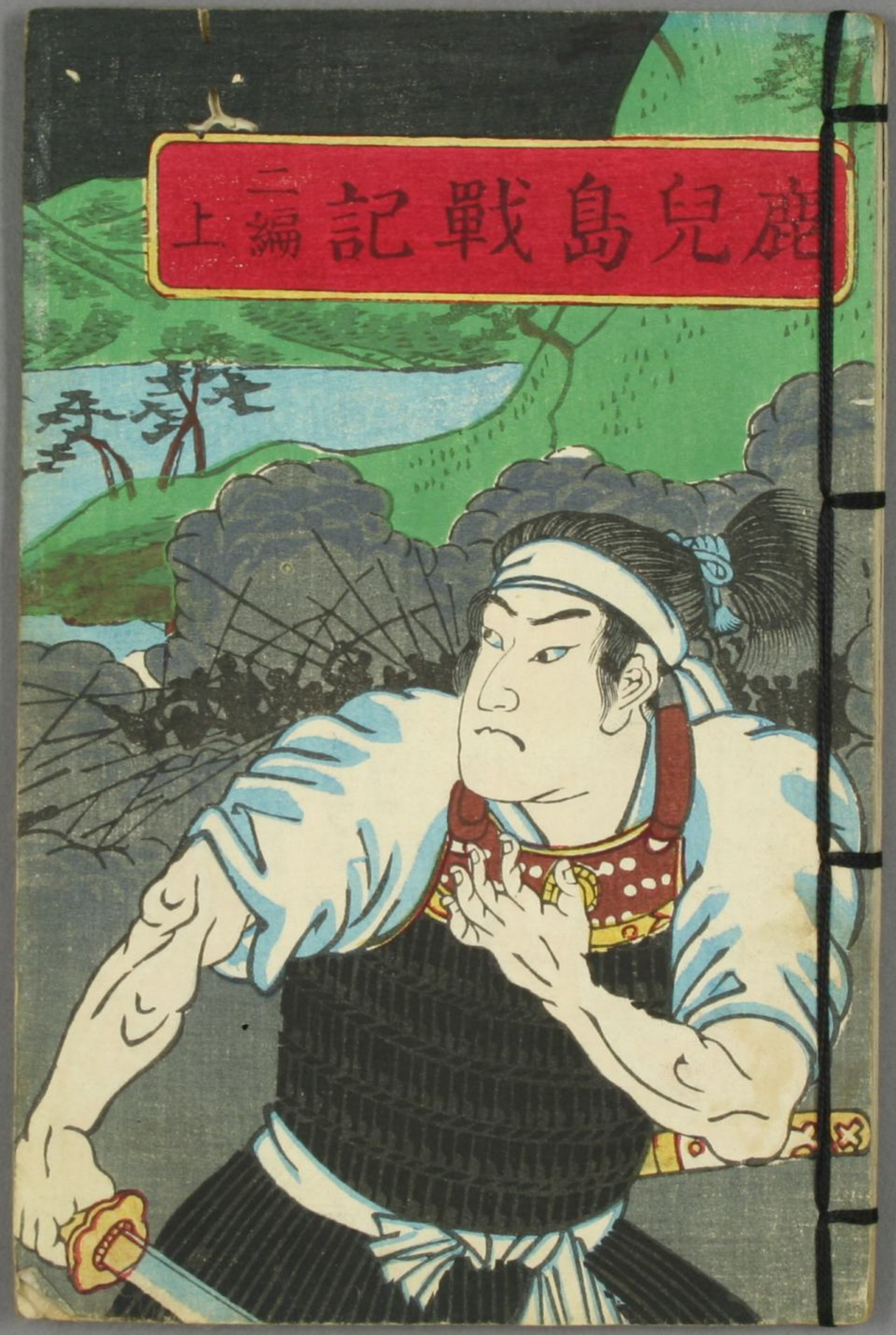

鹿兒島戰記
二編上

篠田仙果 著
永島孟斎 画

繪本 鹿児嶋戦記

東京 青盛堂 板

A620
2

先般ふらの書初号を編ーふ加賀屋の主人お耳、亟厚く諸君の愛顧を蒙りて大吉利市の庫入ふ次編と早くと催されグット乗り地の筆拍子るストンシ泰然ゆと治まりー御代ふ浪立西の海其顛末を聞がまるに輯録て二冊の綴書と一鹿兒島戦記の二編とまりー

明治十稔
三月吉辰

笠亭主人篠田仙果

48-7868

暴徒等六
三隊に分て
熊本縣下へ
乱入ス

逆徒の二將の壹個

桐野利秋

同 篠原國幹

繪本鹿兒島戰記二編之上

東京

再び說暴徒等いまづ

手始めの戰ひは縣廳を懼ゐさんたびし敵對せざるうめいを殺さるれと評議くに一変！集備あふ迄

整ひるれがいざと計りゐ操出！

篠田仙果記

時へいつぞや
明治十年
二月八日の夜ル
九時ごろ聞るこを

◎始まり

とゝく向ふろ

倔強なれと其勢凡そ三百余
人カら自慢の荒くれ生徒あと
より案内もつこれば縣廳間近く
來るとひし〳〵く濁る
声をあゝ立
て縣廳のもの
ゝ〳〵ふ聞け
これい学校生徒
の者が邪曲を
正さんとあゝ
此度義兵を
挙るふ
當り◎

去ようて降参

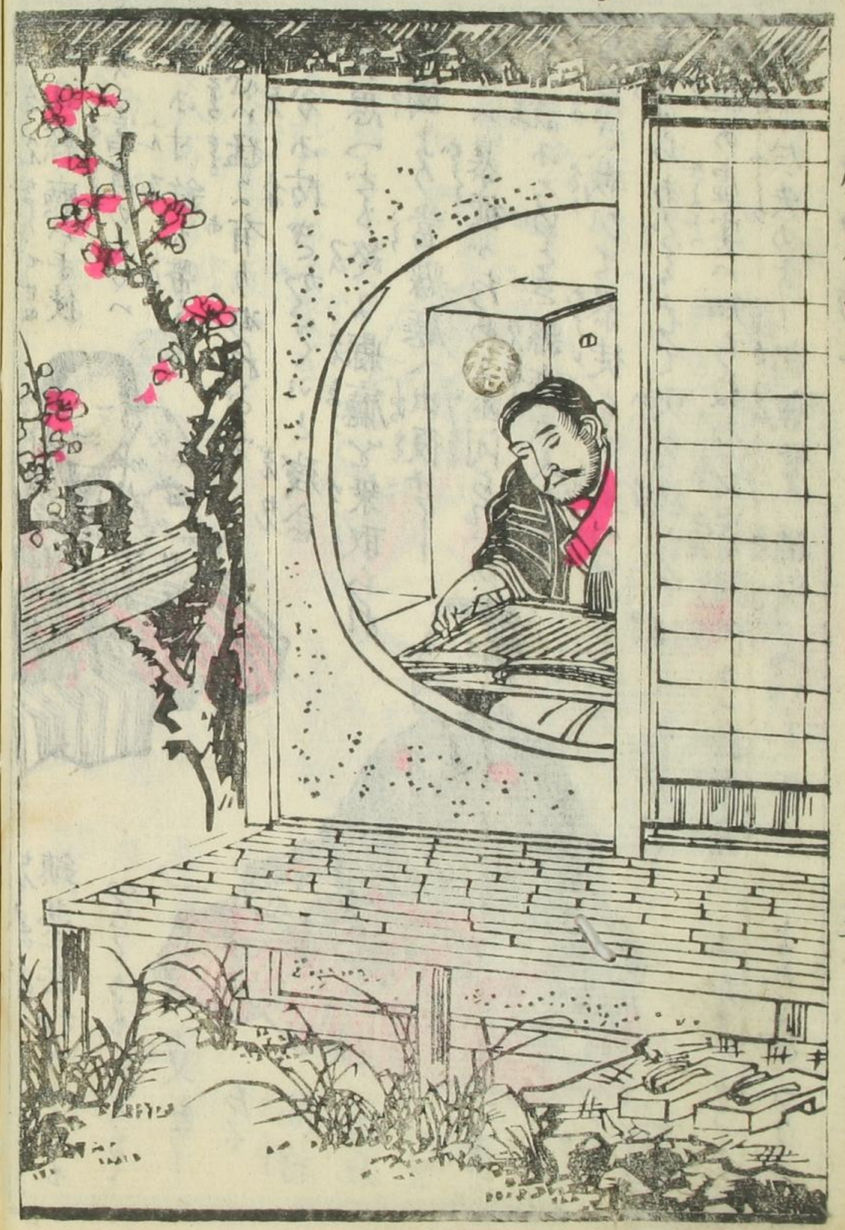
▲あまが命ハ
手ん
いろめく
と呼ろく
ドット
ぞろ
あ

乱入せり縣廳ハ
直宿し人々
加ひて生徒ど
暴ある所業を
知るとハ
ぞ襲
撃せん
とハ思ひよらざる
吏ハれば大ひに驚き
身支度もそこ間ハ
もそ八方より群
入るゆゑ元より
多分の人員ハ居ら

一日例の暴徒ら数
名西郷隆盛の
しるに到り対面
のとゝとゞ紙
そろ〳〵君まを
知ろ〳〵召つらん
此度ハ色〳〵申
あらせ小銃あら
びに弾薬を数十
匹うばひ〳〵う
縣廳をも襲撃し
海陸ともげんばうに
固めさり〳〵ゆゑ

ば且縣廳ハ手捷
ある宿直の人々ハ
身ハ寸鉄も帯ざる
故心ハ猛ゝ有りぬれども
十分ハ防ぎがたくいと残念
ゆゑ思へども終ゝ縣廳を奪取られ
他國より當縣廳へ出役せし
人々ハ暴徒ども為ゆゑ幽閉られ
○一説ハこのとき縣廳の人々等
宜防き戦ひて暴徒らを近づけずよろく
暴徒らあぐんとそ火を放ちて焼ーとゝのゝり
此説の虚実ハ知らねど長崎新聞ハ鹿兒島
縣廳焼失のよし記載せり猶考ふべし

鎮臺兵むらゝとも
そこくもあそこ
吏なり
隊将
憂へ
君
元帥
ハ
ふたり下さるべ
よろこびるまろ



たちまちさん
ひらたちに頼ら
ぞんずると聞より
西々頭をふりその頼らいうみ引ぐに生じい
ある吏を仕出し賊の名をかうむくべ家系
の祝とあるのまあらび醜名万世除きぐに
近くに佐賀ホ江藤あり長州の前原などよ紀
亀鑑まはぞれ身らも心を改め罪を政府ホ
謝さとあくべそい身はかくても周旋さぐーと
まるりホ説諭臣るが暴徒いさらに用ひきれば
その過激を除んとそ日富山ヨ家をくに人ヨ逢い
ずと云ふしひそるホ桐野篠原はじめ村田新八
淵辺高照 池上四郎などを招き叛逆の密談ありホる

さて三ツびきの持船なる琉球
通ひの太平丸ハ彼國よりのどろの
海路鹿兒島ゟ右やうの
事件あるといさゝか知らぬ
去る二月八日の正午入港
あるて錨を投ぜり
間もなく早船七八艘
太平丸をとりかこみ
猛めしげゝ出扨し
あのどゝ凡五六十人
各小銃鎗刀など
得物をたづさへ
どやくと船中へ

西郷の桐埜
篠原の三村
軍議を談ず

乱入せし事ハ
人々ハあるひもとけぬ事
なれども何支やらんと周章
まどひて逃かくるをくるぬるを
その時暴徒の船長なる廣瀬
某と呼出し子細あるて
此船へ番兵を付る間ど
一ツ出帆あるべし強て
投錨せんとあらば兵力をいて
壓をべしとそれくと指揮の下より
鬼と見まがふ壮年と十余人舟よ
のりその余いまなく漕戻りぬ扨
支るや舟長の廣瀬某のこ折々上陸

琉球出

せらるゝ内務少丞木梨精一郎君もの詔く居られられど何ぞ出帆をとゞめたるやあるゝ速らふ出帆の相あるやう取ちらひ下されよと木梨君より鹿兒島縣令大山氏へ使ひをもてきしく迅ぎ可否の返支さらふにあらいつぐらゝ日とあらるる▲

○生徒等太平丸へ乱入る

▲扨同月十六日大山氏より此度の事件を認めて朝廷への届文を木梨君に托せられ俄ふ城下さらゞしく人東西よりけたゝましく彼番所ゝられを見て皆上陸はられべきの暇ふ辛うして

太平丸錨をあげ
鹿兒島港を
出帆する神戸へ
へ港なるる
○大山縣令が届け
書の文意を述べ
大山氏も西々らふ
加賜せらるる
めとゆれど
文ろるべこるる器に
○日當山ふ身をぞめし
西々隆盛ろうすそうこ
鹿兒島戦記二編上

▲ちゃうど時機とあらひらわば
隊長多の人くを招きうち
向ひてやるい玉薬ロ
ロ十分ろの
兵ハ多く集り
ろ拙者が愚
意を述べると
坐席の真中へ
進ろ

繪本太豐記

永島孟斎画

三編迄出版

繪本太閤記

切附本

同　画

新増本

西國奇談

為永春永作

同　画

廿編マテ出板

東京地本問屋

西國米沢町一丁目

加賀屋吉兵衛

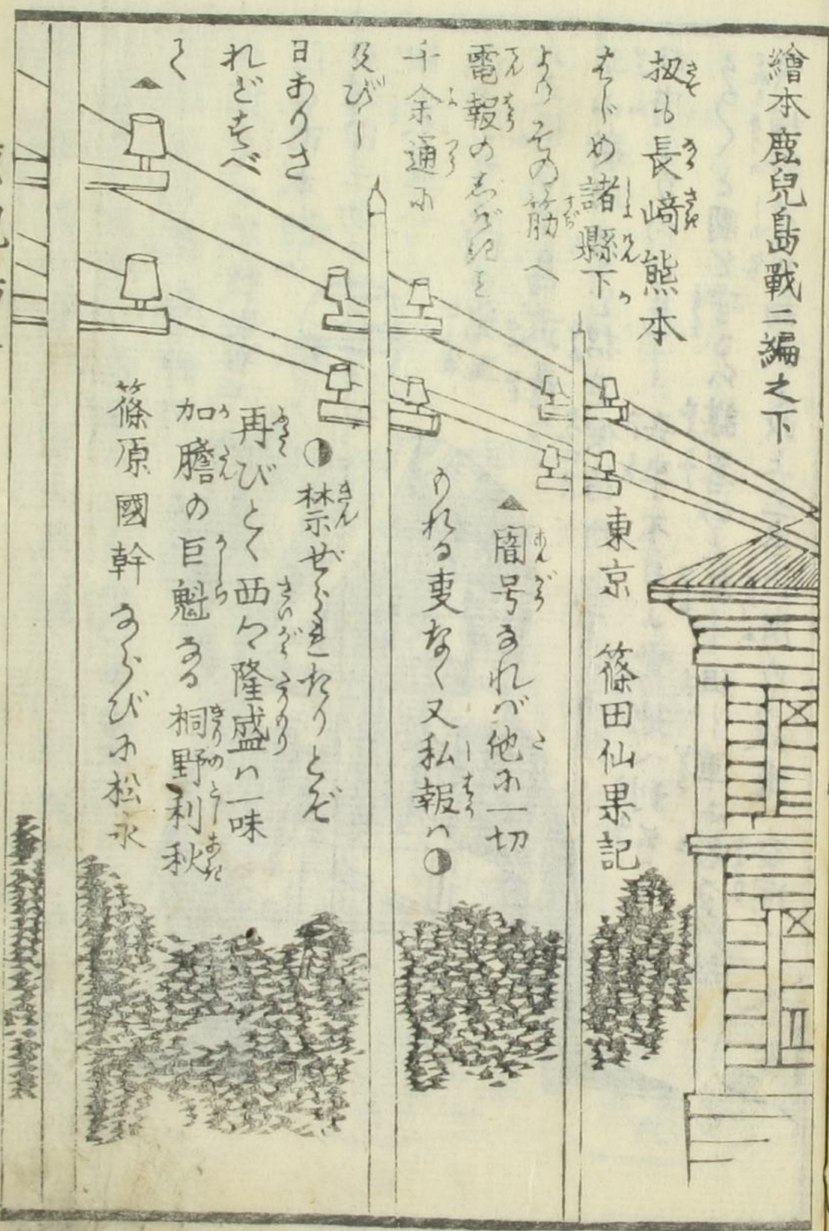
鹿兒島戦記

二編下

篠田仙果録
永島孟齋畫

繪本鹿兒島戰記

東京書肆　青盛堂版



清之丞○西々小平○永山矢一郎○別府新助○同苗九郎
○逸見十郎太○高城十二○山内半左エ門
○弟子丸應助○野村
十郎太○肥後助右エ
門○市本勘介
○村田三助○
伊東直二○
山口小左エ門○兒玉
八之進○中島武彦○
平山新助等を招き僕指折かゞるふ
政府より向らもし兵卒不日は當地へ到着せん
らくと國を守るの謀畧いと拙し但し軍ふ名多く故
僕桐野篠原両氏と以上二名出府のと政府へ奏聞

せんすあり て鹿兒島を發足よつて我らと
護衛として兵士ちらぶふ旨を ちらあ
屆文をさし出し肥後の國ふ乱
入し熊本城を架とく
彼城を根據とし
出張せし鎮臺兵を
一下討ふやぶりふぶ招ふぶして
諸縣の士族ハ皆味方いちぶ
又我兵と挙ると同ぶ響普の
物ふ應ずる如く遠近よて
応援さぶし且攻来る鎮
臺兵いとる柔弱非力ふ
農工商の者共よて我兵ハ

れふ
異なり数年
来勉強仕業ふ
達せし精兵ふれば只一戦ふ蹴散さん
且肥後ふよりと結びし神風連ふ

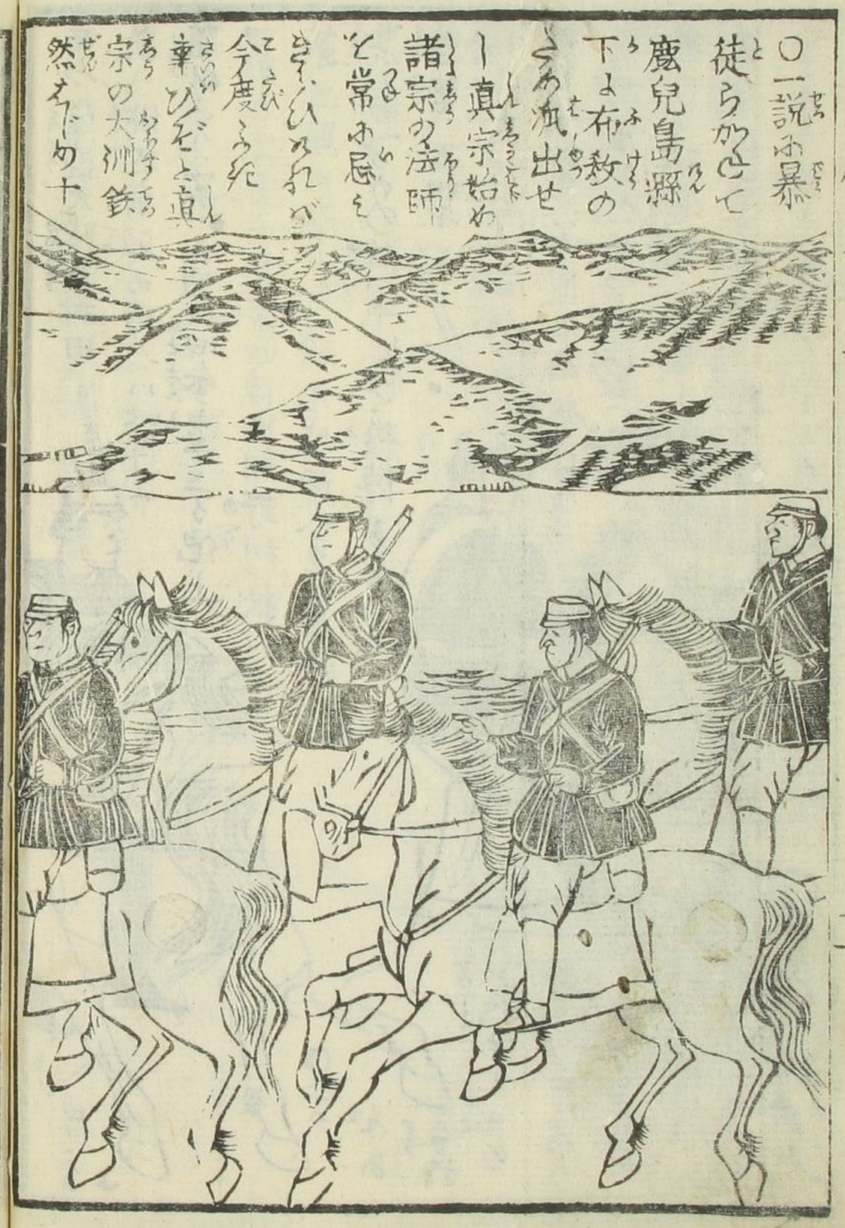
残す居り又昨年の暴挙
ふつゝ當時懲役
中のところの神風
連の人々らも無論走参う
べられば かさくりつて
手筈よ〜此義
如何と有られば一坐のの
雀踊あ〜実ふ良討ふゆゑ一時も早く
と せゝ立ば西々い日とりと操り幸ひ来る
十八日ハ進んで利をゝる吉日あれば出陣
ふ及ぶべ〜とその日の脱議い決〜る
さて十八日ふも成〜ゝば届け書一通縣廳へ
出〜第一陣い篠原國幹 第二陣い

▲喇叭太鼓ふ足並揃へ一体ふ操出〜肥後國の

西々隆盛大隊長村田
新八 編辺高照の西人い此陣ふ
随ひゝり第三陣い旧参事ゝる他上
四郎とゝゝゝり第四陣い桐野利秋
第五陣い永山弥一同九成西人ゝて島津
某とゝゝるの遊軍として後陣ゝゝ
惣勢二万四千人
外ふ凡六百人程残〜て
國と守らせ暴徒の総様深ゝる
前陸軍大将西々隆盛い在
職の日ゝ官服と着〜桐野
篠原西名ゝ陸軍少将の服
とゝゝり惣人数列と正〜〜

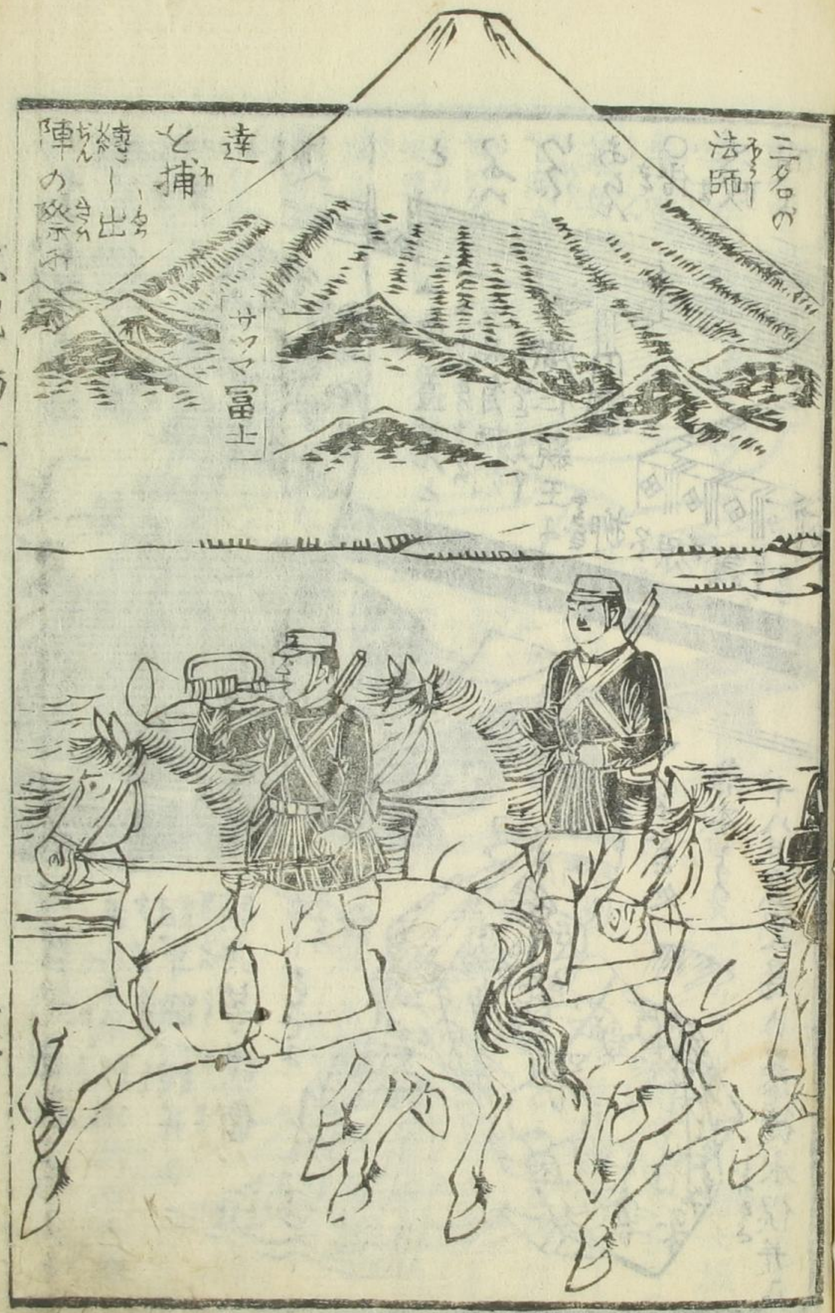
▲二タ手ふ分れ八代ふて九の如く一ゝとゝり熊本さへ

○一説に暴徒らかゝて
薩兒島縣
下よ布教の
ため汎出せ
し真宗始め
諸宗の法師
を常に忌
きらひ給ひ
今度こゝに
来ひぞと真
宗の大洲鉄
然たるの十



三名の
法師
達
を捕
縛し出
陣の祭に

サツマ富士



のぞむ血祭る法師達を切殺し
神前
備へ
と
ふへ
いくぐ
あらん
○偖
又政
府よ

▲處置せんと
二品有栖川
熾仁親王よ
柳原
議官

▽あるべき処
熊本より
十八日鹿児島の暴徒水俣并ふ

☒鹿児島表よつゝ
きんと汽船明治丸不乗
組軍艦一艘并ふ
騎兵等護衛
出發ス

於て
此度の
事件
若兵端
と開き
せば多く
生灵を
滅ぼし
人民の難義
いかゝ
ん生徒ら
前非を悔も
せば寛典よ▲

☒
と副ら
説諭の
ち

人吉の両街道へ出すの
あり又宿ろとして同縣士族
体の者十人ゝ
相越るの電報着せ
ば此上ハ止ことを
有栖川の宮へ勅命あ
暴徒征伐
総督ふ
任じ
参謀

野津陸軍少将三好陸軍少将を副られ
まゝ二月廿六日西京御注輦所
より陸軍大将正三位西ゝ
隆盛陸軍少将正五位
桐野利秋陸軍少将正五位
篠原國幹の宮位褫奪仰せ
出されさうようて有栖川の宮
ゝ二月廿四日御進発より
同日午前十時行在所へ
参内あらせられより
小御所にて拝謁あり次ゝ河村
海軍大輔にも拝謁仰付られ暇と
なり十二時十分ゝ御料の馬車にて

河村君とともゝ日の御門を出て
堺町口門より三条通をとゝを
られ司令官野津少将参謀長
岡本中佐ハ東京歩兵一大隊
大坂歩兵一大隊東京砲兵一小
隊工兵半隊騎兵輜重隊等と
卒ゝ第二の司令官三好少
将参謀野津大佐ハ近衛歩
兵一聯隊東京砲兵一小隊工
兵半隊騎兵輜重隊を卒ゝ
錦の御旗を比叡おろゝゝよびうせ
威気やうゝと出発あり
○夫ハ偖おき熊本縣下へ乱入せゝ

暴徒共ハ軍令三ケ条を定めその一
ゆハ官府の物ハ
ゆを附るゆ
ゆれ第二ハ
官員を
殺すこと
ゆゆ
第三ハ

人民ハ難
義をうけること
ゆれとゆと厳
しく申ゆ
ゆゆ農民ハ租
税をゆるめつゆさんと
ゆゆうハやゆれば

欲ハ眼のゆゆ
を言愚
民ども
ゆゆして
暴徒と助ゆ
ゆゆゆゆ
ゆ

又
其の
神風連も
暴徒まつ
する
その
かりゝ
さて
また熊
本鎮ぐの兵

▲待うけうり
かゝる処へ
暴徒の
先隊
篠原
國幹一ゐの者共
神風連の士族共
を案内者として
兵をすゝめ
安政ぐ
とうち
わうり
千反畑を

暴徒ら寄せ
来る
よゝときてその
本営なる旧
熊本の金城
鉄壁を以て
天下まろぐろき
堅城ほうり大砲数門小銃数千挺
兵上都合八大隊五穀いめとその
味噌塩まぐ十分ホろう入を泰然とゝて
動うゝ其勢ひ猛虎の如く勇ましく頗る
武威とあゝ〳〵今や賊ぎゝふぐ應ぜんと。

坪井
町へと
かゝる
よせる

話二ツハ分る茲ハ植木宿といくるハ
熊本より二里余ゆく
人家四百有余
軒あり此処い
諸方より攻来る
敵をふせぐ
要害の地なる
往古加藤
清正も▲

◑桐野利秋
一手の組い植木宿へくりこめべ他上四郎、永山矢一
い熊本の西南本々口へとくりこんぐり又遊軍島津
某ハ千反畑京町より吶とだくりに操こんぐり
終

▲陣山とよび樹木
あるりくくりこしこんぐ
植木宿と後世こんぐり
閑話へさそあるつ

繪本鹿兒島戦記二編下 終

明治十年二月廿六日御届

定價六錢五厘

下谷上野町二丁目十二番地
編集人 篠田久次郎
米沢町一丁目七番地
出版人 堤吉兵衛